

【 4 】

氏 名	金 智 勇
	キム ジ ヨシ
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 127 号
学位授与の日付	昭 和 53 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	丁茶山文学の研究

論文調査委員 (主 査) 教授 湯 浅 幸 孫 教授 清 水 茂 教授 佐 竹 昭 広

論 文 内 容 の 要 旨

茶山丁若鏞は兩班出身の大学者であり詩人であったが、平民の立場でその一生を終える先覚者である。青年時代は官僚文人として、官職生活のかたわら詩作に熱中した時もあったが、壮老に入っては専ら野人の立場で著述と詩作を以て平生を送ったのである。

彼の著作中、経世済民の書として、広く世に知られているのは経世済民の思想を具体化した「経世遺表」、「牧民心書」、「欽欽新書」の一表二書であり、経世済民、利用厚生の方では、〈原〉、〈説〉、〈啓〉、〈議〉、〈策〉、〈論〉、〈辨〉などが有名である。特に彼の〈論〉中では「田論」「五学論」「技芸論」「湯論」「楽論」と、〈策〉中では「文体策」「人才策」「遭運策」と、〈議〉中では「戸籍議」「身布議」「錢幣議」「公服議」「庶民服議」「通塞議」と、〈原〉中では、「原牧」「原政」「原教」「原徳」「原怨」「原赦」と〈辨〉中の「田結辨」等は経世致用における彼の中心思想であり、千古の卓論名説であろう。

また〈説〉中の「起重架説」「滑車図説」「漆室観画説」「懸眼図説」などは早くも力学、光学の科学的先見の逸論といえよう。

其の他経学の著述、地理歴史の論述、医学及び博物などの著作も汗牛充棟たるものであるがここでは一々挙げない。

此の論文で力を注ぎたいところは、丁茶山の文芸観と彼の文学作品中詩である。彼は文芸観を確立した文学理論家であり、同時に大詩人である。

文芸観としての論著は、「文章之学」(「五学論」中其三、「文体策」「技芸論」と、〈贈言〉中の「為草衣僧意洵贈言」「為李仁采贈言」「為陽徳人辺知意贈言」と、〈書〉中の「寄二児」「答二児」等であり、詩評としての「籟翁閑談」であるが、この諸論述で彼の文芸観を総合していえば、①詩や文章は中和の徳を積んで然る後に始めて書けるものであり、②その教養の上に内的衝動があって之に外的刺激が触れられる時発するのが文章であり、③だからその文体は冷と煖、利と害の対立する二大要素に依り時空につれて変容するものであり、④之に自然と天来の音律が生じて詩となり、⑤その詩作過程はまるで種木の如きで、養分が樹液となり茎を成し葉を生じ、遂に華として咲いた時と同じことであるといい、⑥詩における典故

は須く我が歴史と地理と風習を基盤とする自我の文化から取り入れなければならぬと力説している。そして、その中和の徳というのは憂国愛民の精神であり、経世致用の目的となしている。

蓋しその修己治心は四書六経など経書を根拠するものの、それを発展させて我が国の実情に相符すべく釈明したのであり、また表現の内容は憤世恤民と、旧制度と李朝王政の権力に対する抗拒と革新策であったのである。

このような確固たる文芸観の上に、彼はまた詩人として詩作を専ら営み平生をおくった。

丁茶山の詩作品は、およそ2,460余篇（「興猶堂全書」1934刊）にのぼる巨作であり、尤も大部分が長篇詩である。彼は7歳の時夙に“小山蔽大山遠近地不同”なる詩句を作って、才童だと称えられたが、本格的詩作は14歳から始まる。爾後75歳まで休まず創作と著作を続けて、遂に未曾有の大作家となったのである。

彼の詩は句句節節が皆憤世憂国の絶叫であり、愛族恤民の呼訴であり、貧官汚吏を剔抉する告発であった。それと同時に詩の底辺に流れる主潮は、常に制度改革と精神革新の企みである。

彼は幼少年時代より写實的に觀照する本性を天賦的に享有したと思われる。これは彼の写実主義文学者となる要件ともいえるし、それに、先学の李暉光、柳馨遠、李瀾、朴趾源等の実事求是的学問と文学観が彼の写実主義に滋養分を与えた。

彼の青年期の詩では、主に自然と人事に対して歌っているが、その觀照する自然は唯の自然に止らず、自然の形象と摂理は人傑の氣象と生態の本源と教訓にならしめた。常に高邁な氣品を称え、剛毅なる意志を奨める詩を人事の主題となしたのも注目すべきところである。

彼は33歳の時に廉察使となった。この官職は暗行御使ともいい、王命を承って地方を暗行しながら官吏の善政と暴政と非行などを廉察し、民情を窺う任務であるが、その権力は封庫罷職の実権がある。然し彼はその権力をふりまわす以前に、先ず農村を奥深くまで審察し、その貧困相と原因（主に収奪状況）を探し歩いた。

この時期の詩から彼の告発の絶叫が始まるのである。憐れな農民をいたむ彼の哀傷と比例して起るのは、農民を搾る貧官汚吏に対する忿怒であった。それ以後は農村に限らず、漁村と山谷に巡り、農産、水産、林業などを詳察し、その荒廃化する状況と行政の不条理を剔抉して告発する詩を書いたのである。

壮年の初期の詩では、唯の告発と悲歎の詩であったが、漸次歎息はかわりその不正を匡正しようとする経世済民の経綸策となるのである。

泣いて問題が収まるものではなく、積極的に出て涙の無い社会建設の企てが先決問題であると彼は決心したのであろう。

丁茶山の経世済民、利用厚生、社会改新の具体的文学と著述は、ここから成熟してゆくのである。

彼の官職生活は38歳までであって、39歳の時は自明疏を奏上し帰郷するが、まもなく40歳からは18年間の長い流竄生活が始まるのである。この流配生活こそ彼にとっては不幸極まりないものだが、後世においては偉大なる遺産を創造する契機として幸いともいふべきである。実に沢山の著述と詩作は之の18年間において行われたし、その主題は殆ど告発と革新策なるものであった。即ち茶山学及び茶山精神はここで完成するし、永久不滅の経世済民の経綸が誕生したのである。

彼はその経世済民の理念を詩化する為に、民衆と共に暮らし、庶民の立場で涙を流した。そのため彼の詩には平民の用語が詩語として使われているし、尤も民謡風の詩語を取り民謡調に詠っていた。漢字でもって平民の言語、民謡風の詩語となすには難しいものであるが、然し彼は苦心惨怛として注釈などを附しながら、平民的詩として又は民謡調の詩をなしてあげていた。

実に茶山学は槿域における偉大な遺産であり、宇宙となすべきであり、各方面研究における無尽蔵なる宝庫であると言える。

その一部としての茶山文学研究も、近世思想の総鑑ともいえようが、薄学非才なる筆者としては、その氷山の一角に触れたに過ぎないと思うのである。

論文審査の結果の要旨

この論文は、朝鮮の李朝後半期の啓蒙学者で、詩人としてすぐれた作品を遺した実学派の文人官僚丁若鏞（乾隆27～道光16, 1792～1836）の詩と詩論とについて考察している。丁氏は両班の出身で、字は美庸。頌甫・茶山・与猶堂等の雅号を称した。

著者によれば、朝鮮は1592年の壬辰倭乱（文禄の役）によって日本に破れた結果、新たな刺激をうけ、これと前後して西教（天主教）がその教理と共に西洋の科学思想と器物とを伝えて覚醒を促し、これまで朝鮮の学問を支配していた漢土の経学や朱子学の羈絆を脱して、朝鮮固有の文学・歴史を研究し、国民の厚生利用につながる経世済民の学をせねばならぬという思潮が漸次興り、ここに学風の一変を見るに至ったという。

丁茶山の学問的関心は多方面にわたり、経学・政治・経済・法制・歴史・地理・医薬・器用・言語等に及び、橋梁・城郭の設計、起重機の製作を行った。また、痘瘡方を著わし痘疹の治療に当たったという。その著作は膨大な量に及び「与猶堂全書」に収められている。この中、茶山の経学・政治・経済・科学及び医学については、すでに内外人によっていくつかの研究が発表されているが、詩文については従来殆んど研究されていないようである。著者は近十年来、茶山の文学について二三の論考とハングル訳とを公にしているが、この論文は今般新に稿を起したものである。

本論文は三章から成る。第一章に背景論として李朝後期社会の諸相を概説し、第二章において写実主義の作家としての丁茶山について述べ、第三章で茶山の作品について論じて、茶山の詩は、杜甫を力摹し、人生の苦悩を直叙した写実主義的な叙事詩が多いが、浅俚に流れず、経世の抱負を詠じ、幽憂の思を寄せているとしている。

茶山の詩論を、著者はほぼ次の如く捉えている。茶山は、「詩は志を言う」ことを強調した。故に、志がもと卑汗であれば、強いて清高の言を作しても理致を成さぬ。志がもと寡陋であれば、強いて眩達の言を作しても事実を切実に表現することはできない。

詩は内に鬱結したものが外に溢出することによって生れるから、経史を読み礼楽典章に習熟して、己れの心中に蓄積されたものがなければならぬ。後世、杜工部を孔子の如く尊敬し、その詩が百家の冠冕とされるのは、杜甫の詩が三百篇の遺意を得ているからである。「詩」三百篇は皆な忠臣・孝子・烈婦・良友の惻怛忠厚の心より発したものである。君を愛し国を憂え、時を傷み俗を憤り、刺美勸懲の義をもつもの

でなければ詩ではない。

「杜甫詩を作り、韓愈文を作るに、一字として来処なきはなし」と言われるが、詩において典故を用いるにあたり、その痕跡をとどめないようにすべきである。けれども朝鮮の人々は動もすれば中国の故事を用いる。これは陋劣なことで、かならず「三国史」・「高麗史」・「国朝宝鑑」・「輿地勝覽」等の朝鮮の古典に材を取るべきである。また、茶山は作詩の過程を草木を栽培して花を咲かせることに喩え、人の誠意正心がその根となり、修身篤行がその幹となり、窮経研礼がその津液となり、見聞を広め技能を習うことがその枝葉となり、ついに花開くのであるという。

以上の著者の把握は、おおむね妥当である。茶山の詩は、作者のもつ一種の国粹主義にも拘らず、決して偏狭な載道主義に墮することなく、詩としての香気は豊かである。

なお、茶山の詩には、農漁村で多く使われる俚言と、庶民の生活用語とを詩語として用いているものがあり、韻律をととのえる際に、彼等の国音と漢字音とを、うまく同一字からしぼり出しているために、漢詩本来の律格と音韻とを生しながら、これを読む彼等には朝鮮固有の民謡を彷彿させるという指摘は、朝鮮の国文学としての漢詩を考える場合に、甚だ示唆的である。

茶山の詩文は豊かな漢学の素養に裏づけられて、漢語や漢詩文、或はその典故を自家薬籠中のものとし、あたかも己れに出づるが如く自在に駆使している。しかし著者は漢文学の専攻者ではないためか、十分にそれを咀嚼しきれなかった場合があり、茶山の詩文について誤解誤訳がまま見うけられ、句読の錯誤することまた一にして足らぬ。けだし韓国では独立以来、反日・反華の文化政策が採用され、慕日・慕華の事大思想は敵視され駆逐された。そのため一時は、漢籍はこれを高閣に束ねて読むものなく、研究者が利用することも意に任せなかったという。けれども、漢字漢文が過去の朝鮮においては、吏読・ハングル文字とは比較にならぬ程重要な、思想・文学の表現手段であったことをかえりみれば、朝鮮の文学・歴史等の研究者に、漢学の素養の必要なことは思い半ばに過ぎるものがあるろう。更に附言しておくが、李朝の実学思想を説くにあたり、著者は歴史的諸条件の異なるわが江戸時代の実学思想を安易に援引類比しているのは妥当でない。程伊川・朱子に始まる、中国の朱子学の実学思想と李朝のそれとは本質的に同じものであり、明代後半から清代にかけて、外来の自然科学の受容を促進したのは、朱子学に固有な実学思想であり、その担い手となったのは、やはり知識人である文人官僚であったからである。

この論文は上述のような欠点はあるが、著者は茶山文学研究の先駆者であり、注釈書や研究書を殆んど欠く未開拓の領域に斧鉞を入れた功は多とすべきである。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。